

平成 24 年度 九州大学 2 次試験後期日程 (数学問題)150 分
理学部 (数学科) 3 月 12 日 数学 I・II・III・A・B・C

- 1 本題では行列の成分はすべて実数とし, 2 次の単位行列を E で表す. 以下の問いに答えよ.
- (1) 2 次の正方行列 A が $A^2 = A$ をみたすとき, すべての自然数 n に対して, $A^n + (E - A)^n = E$ となることを示せ.
 - (2) 2 次の正方行列 A で, $A^4 + (E - A)^4 = E$ かつ $A^2 \neq A$ をみたすものを 1 つ与えよ.
 - (3) 2 次の正方行列 A が, $A^4 + (E - A)^4 = E$ かつ $A^5 + (E - A)^5 = E$ をみたすとき, $A^2 = A$ が成り立つことを示せ.
- 2 n は 4 以上の自然数であるとする. 箱の中に $5n$ 個の玉があり, その $5n$ 個の玉に 1 から $5n$ までの番号が 1 つずつ記入してある. 以下の問いに答えよ.
- (1) 箱から無作為に玉を 2 個取り出すとき, それらの番号の和が 5 で割り切れる確率を求めよ.
 - (2) 箱から無作為に玉を 2 個取り出すとき, それらの番号の平方の和が 5 で割り切れる確率を求めよ.
 - (3) 箱から無作為に 2 個の玉を取り出し, その 2 個の玉を戻すことなく, さらに箱から 2 個の玉を無作為に取り出す. 最初の 2 個の玉の番号の和が 5 で割り切れ, 2 回目の 2 個の玉の番号の平方の和が 5 で割り切れる確率を求めよ.
- 3 以下の問いに答えよ.
- (1) 関数 $y = e^{-x}(\sin x + \cos x)$ を微分せよ.
 - (2) $x \geq 0$ のとき, 不等式 $e^x \geq 1 + \frac{x^2}{2}$ が成り立つことを示せ. 次にこれを利用して, 極限值 $\lim_{x \rightarrow \infty} x e^{-x}$ を求めよ.
 - (3) $n = 0, 1, 2, \dots$ に対して, $a_n = \int_{2n\pi}^{(2n+1)\pi} x e^{-x} \sin x dx$ とおく. このとき, a_n を n を用いて表せ.
 - (4) 無限級数 $a_0 + a_1 + \dots + a_n + \dots$ の和を求めよ.

4 O を原点とする座標平面に 2 点 $A(0, 1)$ と $B(2, -1)$ がある．また点 $P(p, 0)$ は x 軸上を動く点で， $0 < p < 2$ とする．このとき，以下の問いに答えよ．

- (1) 関数 $g(x) = \frac{x}{\sqrt{x^2 + 1}}$ の増減と， $x \rightarrow \infty$ や $x \rightarrow -\infty$ のときの極限，および変曲点を調べて， $y = g(x)$ のグラフをかけ．
- (2) $t > 0$ に対して， $t\overline{AP} + \overline{BP}$ を最小にする点 P はただ 1 つ定まることを示せ．ここで， \overline{AP} は線分 AP の長さを表す．
- (3) (2) においてただ 1 つ定まる点 P の x 座標を $p(t)$ とする．関数 $p(t)$ の $t = 1$ における微分係数 $p'(1)$ を求めよ．ただし， $p(t)$ が微分可能であることは仮定してよい．

解答例

1 (1) $B = E - A$ とおくと, $A^2 = A$ より

$$AB = A(E - A) = A - A^2 = O,$$

$$BA = (E - A)A = A - A^2 = O$$

$A + B = E$, $AB = BA = O$ より, 自然数 n に対して

$$(A + B)^n = E \quad \text{ゆえに} \quad A^n + B^n = E$$

よって $A^n + (E - A)^n = E$

(2) $A + B = E$ とおくと, $AB = BA$ であるから

$$A^2 + B^2 = (A + B)^2 - 2AB = E - 2AB,$$

$$A^4 + B^4 = (A^2 + B^2)^2 - 2A^2B^2$$

$$= (E - 2AB)^2 - 2A^2B^2$$

$$= E - 4AB + 2A^2B^2 \quad \dots \textcircled{1}$$

$A^4 + B^4 = E$ であるから

$$E - 4AB + 2A^2B^2 = E \quad \text{ゆえに} \quad AB(AB - 2E) = O$$

ここで, $AB - 2E = O$ とすると, $B = E - A$ より

$$A(E - A) - 2E = O \quad \text{ゆえに} \quad A^2 - A + 2E = O$$

これを満たす行列 A の 1 つは, ハミルトン・ケーリーの定理により

$$A = \begin{pmatrix} 1 & -1 \\ 2 & 0 \end{pmatrix}$$

(3) $A + B = E$ とおくと, $AB = BA$ であるから, (2) の結果を利用して

$$A^3 + B^3 = (A + B)^3 - 3AB(A + B) = E - 3AB,$$

$$A^5 + B^5 = (A^2 + B^2)(A^3 + B^3) - A^2B^2(A + B)$$

$$= (E - 2AB)(E - 3AB) - A^2B^2$$

$$= E - 5AB + 5A^2B^2 \quad \dots \textcircled{2}$$

$A^4 + B^4 = E$ のとき, ① より $A^2B^2 = 2AB$

$A^5 + B^5 = E$ のとき, ② より $A^2B^2 = AB$

上の 2 式より, $AB = O$ であるから

$$A(E - A) = O \quad \text{よって} \quad A^2 = A$$

2 (1) $r = 0, 1, 2, 3, 4$ とし, 5 つ集合を

$$A_r = \{x \mid x \text{ は } 5n \text{ 以下の自然数, } x \equiv r \pmod{5}\}$$

とすると, A_r の要素の個数は n 個. 取り出した 2 個の玉の番号の和が 5 で割り切れるのは, 次の 3 つの事象である.

「 A_0 から 2 個取り出す」

「 A_1, A_4 からそれぞれ 1 個ずつ取り出す」

「 A_2, A_3 からそれぞれ 1 個ずつ取り出す」

これらの事象は, 互いに排反であるから, 求める確率は

$$\begin{aligned} & \frac{{}_n C_2}{{}_5 n C_2} + \frac{{}_n C_1 \times {}_n C_1}{{}_5 n C_2} + \frac{{}_n C_1 \times {}_n C_1}{{}_5 n C_2} \\ &= \frac{2}{{}_5 n (5n - 1)} \left\{ \frac{n(n-1)}{2} + n^2 + n^2 \right\} \\ &= \frac{2}{{}_5 n (5n - 1)} \times \frac{n(5n-1)}{2} = \frac{1}{5} \end{aligned}$$

(2) $0^2 \equiv 0, 1^2 \equiv 4^2 \equiv 1, 2^2 \equiv 3^2 \equiv 4 \pmod{5}$

したがって, 取り出した 2 個の玉の番号の平方の和が 5 で割り切れるのは, 次の 2 つの事象である.

「 A_0 から 2 個取り出す」

「 $A_1 \cup A_4, A_2 \cup A_3$ からそれぞれ 1 個ずつ取り出す」

これらの事象は, 互いに排反であるから, 求める確率は

$$\begin{aligned} & \frac{{}_n C_2}{{}_5 n C_2} + \frac{{}_2 n C_1 \times {}_2 n C_1}{{}_5 n C_2} \\ &= \frac{2}{{}_5 n (5n - 1)} \left\{ \frac{n(n-1)}{2} + 2n \cdot 2n \right\} \\ &= \frac{2}{{}_5 n (5n - 1)} \times \frac{n(9n-1)}{2} = \frac{9n-1}{5(5n-1)} \end{aligned}$$

(3) 最初に取り出した2個の玉の番号の和が5で割り切れるのは、(1)で示した3つの事象があり、さらに、(2)で示した2つの事象がある。

(i) 最初に「 A_0 から2個取り出す」場合の確率は

$$\begin{aligned} & \frac{{}_n C_2}{{}_5 n C_2} \left\{ \frac{{}_{n-2} C_2}{{}_{5n-2} C_2} + \frac{{}_{2n} C_1 \times {}_{2n} C_1}{{}_{5n-2} C_2} \right\} \\ &= \frac{n-1}{5(5n-1)} \left\{ \frac{(n-2)(n-3)}{(5n-2)(5n-3)} + \frac{8n^2}{(5n-2)(5n-3)} \right\} \\ &= \frac{(n-1)(9n^2-5n+6)}{5(5n-1)(5n-2)(5n-3)} \end{aligned}$$

(ii) 最初に「 A_1, A_4 からそれぞれ1個ずつ取り出す」場合の確率は

$$\begin{aligned} & \frac{{}_n C_1 \times {}_n C_1}{{}_5 n C_2} \left\{ \frac{{}_n C_2}{{}_{5n-2} C_2} + \frac{{}_{2n-2} C_1 \times {}_{2n} C_1}{{}_{5n-2} C_2} \right\} \\ &= \frac{2n}{5(5n-1)} \left\{ \frac{n(n-1)}{(5n-2)(5n-3)} + \frac{8n(n-1)}{(5n-2)(5n-3)} \right\} \\ &= \frac{18n^2(n-1)}{5(5n-1)(5n-2)(5n-3)} \end{aligned}$$

(iii) 最初に「 A_2, A_3 からそれぞれ1個ずつ取り出す」場合の確率は

$$\begin{aligned} & \frac{{}_n C_1 \times {}_n C_1}{{}_5 n C_2} \left\{ \frac{{}_n C_2}{{}_{5n-2} C_2} + \frac{{}_{2n} C_1 \times {}_{2n-2} C_1}{{}_{5n-2} C_2} \right\} \\ &= \frac{18n^2(n-1)}{5(5n-1)(5n-2)(5n-3)} \end{aligned}$$

(i) ~ (iii) は互いに排反であり、(ii) と (iii) は等しいから、求める確率は

$$\begin{aligned} & \frac{(n-1)(9n^2-5n+6)}{5(5n-1)(5n-2)(5n-3)} + \frac{18n^2(n-1)}{5(5n-1)(5n-2)(5n-3)} \times 2 \\ &= \frac{(n-1)(45n^2-5n+6)}{5(5n-1)(5n-2)(5n-3)} \end{aligned}$$

3 (1) $y = e^{-x}(\sin x + \cos x)$ を微分すると

$$\begin{aligned} y' &= -e^{-x}(\sin x + \cos x) + e^{-x}(\cos x - \sin x) \\ &= -2e^{-x} \sin x \end{aligned}$$

(2) $0 \leq t \leq x$ のとき, $e^t - 1 \geq 0$ であるから

$$\int_0^x (e^t - 1) dt \geq 0 \quad \text{ゆえに} \quad e^x - 1 - x \geq 0$$

これから, $0 \leq t \leq x$ のとき, $e^t - 1 - t \geq 0$ であるから

$$\int_0^x (e^t - 1 - t) dt \geq 0 \quad \text{ゆえに} \quad e^x \geq 1 + x + \frac{x^2}{2}$$

よって $x \geq 0$ のとき $e^x \geq 1 + \frac{x^2}{2}$

したがって $x \geq 0$ のとき $e^x \geq \frac{x^2}{2}$ ゆえに $0 \leq xe^{-x} \leq \frac{2}{x}$

$\lim_{x \rightarrow \infty} \frac{2}{x} = 0$ であるから, はさみうちの原理により

$$\lim_{x \rightarrow \infty} xe^{-x} = 0$$

(3) (1) の結果より, $\left\{ -\frac{1}{2}e^{-x}(\sin x + \cos x) \right\}' = e^{-x} \sin x$ であるから

$$\begin{aligned} \int xe^{-x} \sin x dx &= \int x \left\{ -\frac{1}{2}e^{-x}(\sin x + \cos x) \right\}' dx \\ &= -\frac{1}{2}xe^{-x}(\sin x + \cos x) + \int \frac{1}{2}e^{-x}(\sin x + \cos x) dx \\ &= -\frac{1}{2}xe^{-x}(\sin x + \cos x) - \frac{1}{2}e^{-x} \cos x + C \end{aligned}$$

したがって

$$\begin{aligned} a_n &= \int_{2n\pi}^{(2n+1)\pi} xe^{-x} \sin x dx \\ &= \frac{1}{2} \left[-xe^{-x}(\sin x + \cos x) - e^{-x} \cos x \right]_{2n\pi}^{(2n+1)\pi} \\ &= \frac{1}{2} \{ (2n+1)\pi e^{-(2n+1)\pi} + 2n\pi e^{-2n\pi} + e^{-(2n+1)\pi} + e^{-2n\pi} \} \end{aligned}$$

(4) (3)の結果から，求める無限級数の和は

$$\begin{aligned}\sum_{n=0}^{\infty} a_n &= \frac{1}{2} \sum_{m=0}^{\infty} \{\pi m e^{-m\pi} + e^{-m\pi}\} \\ &= \frac{\pi}{2} \sum_{m=1}^{\infty} m e^{-m\pi} + \frac{1}{2} \sum_{m=0}^{\infty} e^{-m\pi} \\ &= \frac{\pi}{2} \cdot \frac{e^{-\pi}}{(1 - e^{-\pi})^2} + \frac{1}{2} \cdot \frac{1}{1 - e^{-\pi}} = \frac{(\pi - 1)e^{-\pi} + 1}{2(1 - e^{-\pi})^2}\end{aligned}$$

補足 $-1 < x < 1$ のとき

$$1 + x + x^2 + x^3 + \cdots = \frac{1}{1 - x}$$

これを微分すると

$$1 + 2x + 3x^2 + \cdots = \frac{1}{(1 - x)^2}$$

さらに，上式の両辺に x を掛けると

$$x + 2x^2 + 3x^3 + \cdots = \frac{x}{(1 - x)^2}$$

上の第1式と第3式に $x = e^{-\pi}$ を代入すると

$$\sum_{m=0}^{\infty} e^{-m\pi} = \frac{1}{1 - e^{-\pi}}, \quad \sum_{m=1}^{\infty} m e^{-m\pi} = \frac{e^{-\pi}}{(1 - e^{-\pi})^2}$$

4 (1) $g(x) = \frac{x}{\sqrt{x^2+1}}$ を微分すると

$$g'(x) = \frac{1}{(x^2+1)^{\frac{3}{2}}},$$

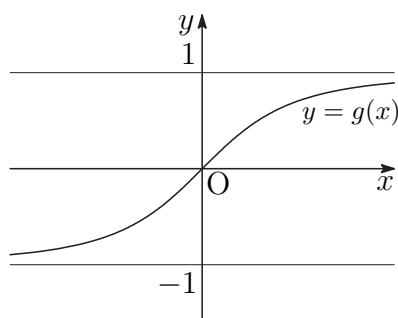
$$g''(x) = -\frac{3x}{(x^2+1)^{\frac{3}{2}}}$$

関数 $g(x)$ の増減は、右の増減表から単調増加であり、変曲点は

$$(0, 0)$$

グラフの概形は、右の図のようになる。また、求める極限は

x	\dots	0	\dots
$g'(x)$	$+$	$+$	$+$
$g''(x)$	$+$	0	$-$
$g(x)$	\nearrow	0	\curvearrowright



$$\lim_{x \rightarrow \infty} g(x) = \lim_{x \rightarrow \infty} \frac{x}{\sqrt{x^2+1}} = \lim_{x \rightarrow \infty} \frac{1}{\sqrt{1+\frac{1}{x^2}}} = 1,$$

$$\lim_{x \rightarrow -\infty} g(x) = \lim_{x \rightarrow -\infty} \frac{x}{-x\sqrt{1+\frac{1}{x^2}}} = \lim_{x \rightarrow -\infty} \frac{-1}{\sqrt{1+\frac{1}{x^2}}} = -1$$

(2) $A(0, 1)$, $B(2, -1)$, $P(p, 0)$ より

$$\overline{AP} = \sqrt{p^2+1}, \quad \overline{BP} = \sqrt{(p-2)^2+1}$$

$f(p) = t\overline{AP} + \overline{BP}$ とおくと

$$f(p) = t\sqrt{p^2+1} + \sqrt{(p-2)^2+1},$$

$$f'(p) = \frac{tp}{\sqrt{p^2+1}} + \frac{p-2}{\sqrt{(p-2)^2+1}}$$

$$= tg(p) + g(p-2) \quad \dots (*)$$

$t > 0$ より、(1)の結果から $f'(p)$ は単調増加である。また

$$f'(0) = -\frac{2}{\sqrt{5}} < 0, \quad f'(2) = \frac{2t}{\sqrt{5}} > 0$$

であるから、 $f'(c) = 0$ ($0 < c < 2$) を満たす c がただ1つ存在する。したがって、 $f(p)$ を最小にする点 P はただ1つ存在する。

- (3) (2)においてただ1つ定まる点Pのx座標 $p = p(t)$ について、 $f'(p) = 0$ であるから、(*)より、①および①を t について微分した②を得る。

$$\begin{cases} tg(p) + g(p-2) = 0 & \dots \textcircled{1} \\ g(p) + tg'(p)p'(t) + g'(p-2)p'(t) = 0 & \dots \textcircled{2} \end{cases}$$

$t = 1$ を①に代入すると $g(p) + g(p-2) = 0$

$y = g(x)$ は原点に関して対称であるから、 $g(p) = -g(-p)$ より

$$-g(-p) + g(p-2) = 0 \quad \text{ゆえに} \quad g(p-2) = g(-p)$$

また、 $g(x)$ は単調増加であるから

$$p-2 = -p \quad \text{これを解いて} \quad p = 1$$

$p(1) = 1$ に注意して、 $t = 1$ を②に代入すると

$$g(1) + g'(1)p'(1) + g'(-1)p'(1) = 0$$

(1)の結果から、 $g(1) = \frac{1}{\sqrt{2}}$ 、 $g'(1) = g'(-1) = \frac{1}{2\sqrt{2}}$ を上式に代入すると

$$\frac{1}{\sqrt{2}} + \frac{1}{2\sqrt{2}}p'(1) + \frac{1}{2\sqrt{2}}p'(1) = 0 \quad \text{よって} \quad p'(1) = -1$$